

## 複文の認識構造について その3

高橋英光

### 第四章 話し手の立場の問題

言語が直接表すのは概念でしかない。だから言語を見てもそこから話し手の立場というものの存在に気付くのはなかなか容易ではない。しかし写真や絵画と同様、言語も表現である以上主体の位置がつきまとうのであって、第二章でも論じられた通り、特に思考・推量の動詞の複文の表現過程には主体の立場が大きな役割を演じている。話し手の立場を追跡することによって Factive の複文と Non factive の複文との過程構造の違いを分析し、そこでは話し手が現実的な立場か、それとも観念的な、非現実的立場かということが根本的な区別であることが明らかになった。本章の狙いは複文における話し手の立場を検討することにあるのだが、話し手の立場の問題は単に思考・推量を扱った複文の特殊性として片付けるのではなくて、言語に普遍的な問題として理解すべき性質のものである。それ故言語一般における話し手の立場という問題との接点を踏まえながら、複文の従節における Non factive つまり非現実の立場における話し手とは一体具体的にどういうものなのか、その認識的背景を簡単に考察することにする。

欧米流の言語学では話し手の立場の問題は周辺的な、二次的なものとして片隅に追いやられる傾向にあり、断片的に言及されることはあっても少なくとも言語学の中心問題に据えられることはなかった。言語における話し手の立場の原理を「言語の実践に於いても、又言語の研究に於いても、極めて重要である」<sup>1)</sup>として中心的に取り上げたのは時枝誠記の言語過程説であり、これを是

原稿受領日 1985年11月27日

正、発展させた三浦つとむの言語理論である。以下に引用するのは観念的な自己の立場と現実的な自己との違いを経験的にとらえて、主体的立場と観察的立場との区別を与えた時枝誠記を評価し、又批判した論文の一部であるが、今の当面の問題である Non factive の複文における話し手のあり方についての重要なヒントを与えていると思われる。

……時枝は表現も理解もどちらも「主体的立場」だと説明している。けれども野球の実況放送のように、話し手が目の前に存在している事物を観察して表現する場合もあれば、ポオの小説「黒猫」のように、空想の世界の話し手が一人称で物語を展開する場合もあって、前者は現実に「観察的立場」で表現するが、後者は観念的な自己分裂によって観念的な自己が空想の世界の話し手にならなければならない。しかも、この現実には「主体的立場」をとっている話し手が、空想の世界の中では黒猫に対しては「観察的立場」をとっているという、対立物の直接的な統一すなわち矛盾が存在する<sup>2)</sup>。(強調は原文)

小説とよばれる言語表現は作者の空想で創造した世界を語っているわけであり、全編、非現実的な立場にいる作者(=話し手)によって展開されることが要求されている。推量を表す複文の従節が、言わば一種の「夢」を扱っているのと同様、小説自体も「夢」を扱っているという点において話し手の認識的立場の共通性を見ることができる。つまり小説とは全て Non factive なのである。それ故上記の小説における「主体的立場」の中の「観察的立場」という二重化した話し手の立場の論理を複文にも適用することが可能になってくる。具体的な例文に当たってみることにしよう。但し煩雑を避けるために動詞を 'think' に限ることにする。

1) 時枝誠記 (1941)「国語学原論」(東京:岩波書店) p. 24.

2) 三浦つとむ (1977)「言語学と記号学」(東京:勁草書房) pp. 199-200.

- (1) He thinks I love him.
- (2) She thinks her performance was excellent.
- (3) You think Marilyn likes you.
- (4) I think he is honest.

(1)の 'I love him' は 'He' の思考世界を、(2)の 'her performance was excellent' は 'She' の思考世界を、(3)の 'Marilyn likes you' は 'You' の思考世界を、(4)の 'he is honest' は 'I' の思考世界を語っている点で、各文の話し手が従節において基本的に「主体的立場」をとっているのは明らかである。現実的の自己のままでは思考の内部——特に(1)(2)(3)では他者の思考の内部——に入り込むことはできない。しかし一方で話し手は主節の主語の思考世界の内部に居ながら、同時に主節の主語に対しては「観察的立場」をとっていることも明らかである。例えば(1)において話し手は自己を一人称 (I) で、主節の主語の「かれ」を三人称 (him) で把握しているという事実は、話し手が従節において「私」のままであり、主節の主語 'He' に対して観察者であることを示している。話し手が自己を 'he' とか 'she' と三人称で、'you' と二人称で他者扱いするのでない限り、或は他者を 'I/me' と一人称扱いするのでない限り、つまり話し手が自己を 'I/me' と一人称で言及し、他者を 'you' と二人称、或は 'he/she' と三人称で言及している限りにおいて話し手は主節の主語に対して「観察的立場」をとっていることは否定しえない。(2)では主節の主語 'She' を従節でも三人称 (her) で、(3)では主節の主語 'You' を従節でも二人称 (you) で扱っているわけであるから、話し手が主節の主語に対する「観察者」であることが明らかである。(4)についても自己自身に対する「観察者」と考えることに異論は無いだろう。それ故 Non factive の複文を一般化して、

- (5) A think(s) (that) {S}.

とすると、従節 S の話し手の基本的立場は、A の思考の世界を語っている

点で現実には「主体的立場」だが、A に対しては「観察的立場」をとっているという二重の立場であると言うことができる。

さて A think(s) (that) [S] 型の複文の従節 S において話し手が「私」自身であり A に対して「観察者」であるという理解は常に妥当なのであろうか。(6)~(8)のような言語例は興味深い問題を提供してくれる。

(6) You think (that) perhaps Jane told a lie.

(7) She thinks (that) maybe Jane told a lie.

(8) He thinks (that) perhaps Jane is true.

perhaps, maybe は「話者指向副詞」(speaker-oriented adverb) と呼ばれ、話し手が自らの判断に付きまとうためらいの気持、推量の側面を直接押し出した表現であるが、(6)~(8)の文において問題になるのは 'perhaps', 'maybe' が文の話し手の咬きだけでなく、時にはそれ以上に主節の主語の咬きにも感じられる、つまり(6)では 'You' が 'perhaps' と言い、(7)では 'She' が 'maybe' と言い、(8)では 'He' が 'perhaps' と言っているようにも響くという経験的事実である。これは言語における話し手という表現主体の存在を端的に知らしめる現象として貴重な事実であるが、話し手を単に「観察者」としてみても何故話し手指向の 'perhaps' や 'maybe' が「あなた」や「彼女」「彼」指向的に感じられるのかを説明できない。

すぐに思いつくひとつの説明法は(6)では話し手が 'You' になりきり、(7)では 'She' になりきり、(8)では 'He' になりきっていると考えることであろう。主節では「私」の立場で描写しているが、従節で主節の主語の立場へ移って同一化していると考えれば、本来話者指向の副詞が主節の主語指向と感じられるのも納得できるわけである。三浦つとむの用語を借りて言えば、話し手が観念的に自己分裂して他人の立場に移っているということになる。ではこれらの例は(5)型の複文の従節に本来的な話し手の立場——「主体的立場」の中の「観察的立場」——に対する例外として扱うべきであらうか。観察的な自己の立場を完全に失って主体的に主節の主語になりきっているのではあろうか。それ

とも観察的立場を保存しているのだろうか。これを調べてみよう。先に見た通り話し手の立場は人称代名詞の選択に良く反映される。ところが(6)(7)(8)各文の従節に人称代名詞は表れていない。そこで媒介的手段として代名詞が表れる構文を話し手が採用した場合の人称代名詞の選択を探ってみることにする。仮りに(6)において Jane が嘘を言った相手が主節の主語 'You' と呼ばれる人物（つまり(6)の文の聞き手）であるとし、(7)では 'She' と呼ばれる人物であるとし、(8)では Jane が誠実である相手がやはり主節の主語 'He' に当たる人物であるとしよう。すると、もし主節に当たる人物が従節の中に表現されるとすると各文は(9)(10)(11)のようになるのが自然であろう。

- (9) You think that perhaps Jane told a lie to *you*.
- (10) She thinks that maybe Jane told a lie to *her*.
- (11) He thinks that perhaps Jane is true to *him*.
- (12) (?) You think that perhaps Jane told a lie to *me*.
- (13) (?) She thinks that maybe Jane told a lie to *me*.
- (14) (?) He thinks that perhaps Jane is true to *me*.

(12)~(14)は不適格というわけではない。話し手は他者 ('You', 'She', 'He') を 'me' と一人称扱っているのであるから完全に観察的立場の自己を離れて他者と同一化しているということであって、複文の従節というよりは直接話法の被伝達部(セリフ)的になってしまうのである。要するに後方の節(従節)が前方の節(主節)に組み込まれていて有機的な統一体を成すという複文についての理解の仕方からすれば複文的ではないのである。この様に複文の従節として捉える限りにおいて、主節の主語という対象を表すのに(6)では 'you' と二人称、(7)では 'her', (8)でも 'him' と三人称という風に主節と全く同じ人称が選ばれ易く、(12)~(14)の様に主節とは異なる一人称把握が選ばれ難いという事実は、'perhaps' や 'maybe' がどんなに主節の主語という他者の声に響こうとも話し手が基本的に観察的立場を失ってはいないことを示唆している。すると(6)~(8)の各文の従節における話し手の立場の曖昧性を合理的に説明する方法

は唯一次のようになるだろう：話し手は自己であることを維持しながら同時に観念的に他者になっている、つまり私と他者という二人の人間の立場を兼任している。それ故(6)~(8)の型の複文は Non factive の複文の標準型(5)への例外ではなく、むしろやや特殊な例と考えられるべきものであり、「主体的立場」の中では A に対して「観察的立場」をとるという従節における話し手の二重化という法則は貫かれている。ただ A に対する「観察的立場」と共に A そのものであるという立場をとっている点でここにもうひとつの話し手の二重化が加わっていると言えるだろう。

話し手が私であると同時に観念的に他者でもあるという二重のあり方は、一見奇異で理解し難いものであるかも知れない。しかしこの中間的で曖昧な、一人二役的な話し手の立場は以前から描出話法と呼ばれる表現法においても実践されているのが知られている。次の(15)~(17)を較べてみよう。

(15) "Here comes Jack", said Fred.

(16) On turning round Fred saw Jack coming across the street towards him.

(17) "Look!" Fred turned round. Jack was coming across the street towards him.

(いずれも B. Fehr (1938)<sup>3)</sup> より)

(15)の 'Here comes Jack' は Fred の立場で、(16)の全文は Fred に対する純然たる観察者の立場で話し手が語っているのは言うまでもないが、(17)の 'Jack was coming across the street towards him' について Fehr は次のように単なる語り手による報告とは考えられず、'Fred' の視覚を表現する意図をもっているのであり、語り手は登場人物 (= Fred) を通して語り、登場人物 (= Fred) は語り手を通して語っている、と述べている。

3) Fehr B. (1938) "Substitutionary Narration and Description" *English Studies* XX. pp. 97-107. これは筆者の知る限り描出話法における話し手の立場の真相に最も迫っている論文である。

...it follows with absolute certainty that the sentence "Jack was coming across the street towards him" cannot be looked upon as a mere report, a sort of stage direction made by the author for the benefit of the reader. It is intended to express Fred's vision. And what we were saying about the stylistic effects of the reporter speaking through the actor and the actor speaking through the reporter applies equally well here on the narrative-descriptive plane. It is the reporter running in on the actor's vision and it is the actor lending his sight to the articulate reporter.<sup>4)</sup>

認識論的にもう一步踏み込んで言えば、話し手は 'Fred' に対して観察的立場をとる自己でありながら同時に Fred の立場をとっているのであり、「私」であり 'Fred' でもあるということになる。動詞の過去時制 'was' と三人称代名詞 'him' は前者を反映しているし、動詞の進行形 '(be) coming' は後者を反映している<sup>5)</sup>。これはちょうど(9)(10)(11)において二・三人称代名詞 'you'

4) *Ibid.*, p. 98.

5) 動詞の過去形 'was' が話し手の現実的立場を反映するという事については説明を要するだろう。過去の出来事を過去時制で表現するということは一見自明の理にも思われるかも知れないが、このためには話し手が最終的に現実的な現在の時点に立っている事が絶対条件である。たとえ対象が過去の時間内に起こっている出来事であっても話し手が観念的にその出来事と同時の位置へ移行したままであれば、時間は過去でも時制は現在になる。(三浦つとむ (1976)「日本語はどういう言語か」(東京:講談社) pp. 211-228. に上記のような優れた言語の時制についての説明がある。又この時制論の英語への適用として拙論 (1978)「英語時制についての一考察——いかにして話者は命題に自らを関係づけるか」(北海道英語英文学 XX III pp. 69-83. を参照のこと)。時制とは話し手と対象との時間関係の反映である。

過去進行形とはこの名が示す通り過去という時制認識と進行形という相認識の結合であるから 'was coming' = 'Past' + '(be) coming' と意味的に分解できる。それ故 'was' は形式上これより分解できなくとも意味上二つの要素——'Past' と 'be'——から成っている。従って 'was' の 'Past' の意味の部分は直接的には「Jack」がこちらへやって来る」出来事の時間を表現するが、

‘her’ ‘him’ が話し手の観察的立場を反映し、話者指向副詞が主節の主語の立場をより大きく反映しているのに対応している。話し手という者が観念的に自分自身と自分以外の人間の立場の双方をひとつの clause の中でとることができるということを認識論として認めなければ(6)~(8)のような複文と(17)のような描出話法の文のもつ特殊性、とりわけ文から我々が経験的に受け取る言語の意味のダイナミズムについて合理的な説明を施すことは不可能である。

従節の陳述が主節の主語の声に感じられ、話し手が主節の主語の立場をとることはありえても、複文という文形式においては話し手が観察的な自己の立場を失うことはなく、複文を複文たらしめている本質のひとつは主節から従節へとたとえ対象が現実の世界から非現実へと移り、これに応じて話し手自身の立場も現実的なそれから非現実へと移りながら、その一方で話し手は観察的な自己の立場を常に堅持している点で一貫している所にあることが上記の論考で確認されたと思われる。例えば次の二文を(1)~(4)と比べてみよう。

(18) But, he thought, I keep them with precision.

(19) I could just drift, he thought, and sleep and put a bight of line around my toe to wake me.

(‘he’=‘I’=‘the old man’)

(E. Hemingway, *The Old Man and the Sea*)

表面的に文形式のみを見る限り複文と大差がないが、(18)と(19)の語り手は ‘he thought’ 以外の部分で完全に観察的な自己の立場を脱け出して「老人」の立

---

反映的には話し手の現実的な現在の立場を表すことになるし、一方 ‘is (be)’ の意味の部分は「Jack’ がこちらへやって来る」出来事についてのその場の同時的判断(統覚)の表現であるから過去のその場に居る Fred の位置に観念的に身を置いた話し手の立場、即ちその時その場で直接に対象(出来事)を目撃する Fred の視覚を反映するのである。過去時制と判断という二つの全く異種の認識がこれ以上形式上分解不可能な一単語 ‘was’ に結びついているところにも、英語の中の屈折語的性格を垣間見ることができる。

6) 直接話法と間接話法との違いが被伝達部における話し手の立場に違いの本質がある

へ観念的に移行しているから、これはもはや複文ではなく話し手の立場のあり方としては直接話法である<sup>6)</sup>。‘he thought’の前後のコンマの背後に話し手の観念的な立場の移動——「老人」から「私」(前)と「私」から「老人」(後)——が隠されている。

過去において話し手の立場を扱った研究の代表例として大江(1975)<sup>7)</sup>と久野(1978)<sup>8)</sup>等がある。いずれの研究も複文が研究対象ではないし、又ある種の言語現象を説明する上で話し手の立場のあり方を理論化することが有効である場合がある、という程度以上のものではなく、決して話し手の立場の問題が言語学の根本であるという主旨でなされた研究ではない。しかし試みとしては注目すべき面を含んでいるのであり、特に大江(1975)には本章のテーマである(5)のタイプの複文についての具体的分析を見出すことができる。大江(1975)は「自己の二分」と「離脱した自己」という用語を駆使して日本語の述語の「主観的」側面と取り組んでいるが、これらの用語は本章でこれまで述べてきた話し手の認識的な立場の内容を表しているように一見思われる。しかしその理解の仕方、適用の仕方には大きな隔りがある。大江は(20)(の従節)について「…話し手は専ら他者である John の視点に立って自らの動きをあたかも他者の動きであるかのように眺めている。これは離脱した自己の例である」<sup>9)</sup>と解説する。

(20) John thinks that I'll come to his office.

しかし(20)の表現過程を少し詳しく調べれば大江の分析が不適當であることは明

---

のは言うまでもない。前者では話し手が伝達部の主語になり切ることが、後者ではなり切らないことが、つまり冷徹な観察者であることが要求されている。それ故次の(a)と(b)とは同一の clause ‘Tom is mad’の背後に主体(話し手)の立場の違いを、つまり過程構造に差異を認めなければならない。

(a) She says (to herself), “Tom is mad”.

(b) She thinks that Tom is mad.

7) 大江三郎(1975)「日本語の比較研究——主観性をめぐって」(東京:南雲堂)

8) 久野 暉(1978)「談話の文法」(東京:大修館)

9) 大江, op. cit., p. 217.

らかである。「専ら他者である John の視点に立って」、「離脱した自己」に話し手になっていたら従節でどのような人称代名詞が選ばれるのかを考えればわかることである。話し手にとって 'John' という人物は三人称の関係にある。と言うことは 'John' にとっても話し手である「私」は三人称の関係に立っているということでもある。すると 'John' の視点から眺められるならば従節の主語が一人称 'I' であるはずはなく、三人称 'he' とか 'she' でなければ道理に合わない。さらに 'office' は John にとって他ならぬ自分の物であるから 'his office' ではなく 'my office' でなければ道理に合わない。つまり⑫のようにならねばならない。

(21) John thinks, "He (She)'ll come to my office".

⑫においては大江の考えたような「自己離脱」を話し手は行っていないのである。複文である限り従節のみの話し手の「自己離脱」はあり得ない。

大江の誤解は動詞 'come' が⑫の場合、他者の方向への、他者に重点を置いて話し手自身の移動を表す表現であることを話し手が観念的に他者になり切っていることと混同した所に直接的には起因するが、もっと根本的には複文における話し手の立場、ひいては言語における話し手の立場に対する十分な洞察、即ち認識論を欠いている所に起因する<sup>10)</sup>。⑫の表現過程を最初から追って見よ

10) 詳細な批判は別の機会に譲らねばならないが、久野 (1978) の「カメラ・アングル (視点) 説にも大江と類似した誤解が含まれている。久野は(a)では「カメラ・アングル」がどこか——John 寄りか、Mary 寄りか、等距離か——を知る構文法的手懸りが無いが、(b)では 'his wife' という John 中心の表現を用いているから John 寄りの「カメラ・アングル」が作った文であると言う (pp. 129-134.)。

(a) John hit Mary.

(b) John hit his wife.

(Mary=his wife)

しかし話し手がある文で John 中心の表現をすることと、話し手が John 寄りの視点、つまり John に近い、或は John と同一の立場を採ることとは同じ事ではないのだが、久野にはこの区別についての自覚がない。

(c) "John hit me", Mary said repeatedly.

(c)にあっては 'John hit me' が John 中心の表現形式であることに疑いが無いが、一方話し手が Mary と同一化している、完全に Mary の「カメラ・アング

う。話し手はまず現実的立場における‘John’に対する観察者として‘John thinks…’と語り始め‘John’の思考行為を捉える。‘that’で次に展開される内容を抽象的にのみ把握する。この時話し手は従節の内容を大掴みに、言わば外側から捉えている点で現実的立場に居ると考えることもできるが、この単語は現実世界からの出口であり且つ非現実世界への入口でもあることを考え合わせると現実から非現実への過渡的立場をとっているとも考えられよう。続いて‘…I’ll come to his office’で‘John’の思考の世界の内部へ入り非現実的立場を基本的にとっているが、自己を一人称‘I’で、‘John’を三人称‘his’で表していることからわかるように話し手は‘John’に対しては観察者となっている。主節においては現実的立場の中の観察的立場だが従節においては非現実的立場の中での観察的立場をとるという(5)型の複文における話し手の立場の本質が当然ながら貫かれている。

以上の様に話し手の認識における動的な運動による話し手の立場の様々なとり方とその移行という問題を適確に言語理論の中心に据えることが他の言語形式についてと同様、複文の、殊に思考・推量を扱った複文の意味の理解には不可欠なものとして要求されるのである。

☆

☆

☆

ひとつひとつの単語もひとつひとつの節も主体がある立場から世界に枠づけをすることなしには表現しえない。これは現実世界であれ精神世界であれ、本来運動・変化の直中にあるものを静止させ固定させることでもある。それ故静止、固定された形式(form)はその背後に意味(meaning)として運動、変化を隠し持っていることになる。

---

ル」(視点)を採っていることも又疑いが無い。一般的に言えば人物Aと人物Bが登場する文において話し手がA中心の表現形式を採ることと、B寄りの、Bと同一の観念的立場(視点)を採ることとは両立するのである。(b)についてもJohn中心の表現であると言う範囲において正当ではあるが、話し手がJohnと観念的に同一化していることは通常あり得ないのは勿論のこと、話し手がMaryよりJohnに近い「カメラ・アングル」即ち観念的位置を占めていると主張するのに十分な論理的説明を久野は行っていないのである。

「行間を読む」ということはしばしば言われる。しかし間を読まねばならないのは文間に限ったことではなく、言語の追体験では語間を、句間を、節間を、段落間を読まなければならない。間を読むということは取りも直さず話し手の側の認識の動きを読むということである。これは概念の連続という枠としてしか表れていない言語の表現形式から枠を取り払い、枠づけをする以前の話し手の認識ひいては対象まで溯る行為でもある。

単語と単語のつながり、節と節のつながりとは主体が移行したり飛躍することだと理解して複文の意味と取り組むか、それとも現象的に二つの形式（節）の和として固定して捉えたり、或は意味の情報機能的側面で処理するかに言語研究の大きな分かれ目であると思われるのである。

---

補注) 現代の言語学者が意味という言語の背後にある人間の精神のダイナミズムの中へ深く入り込めず、入口で立ち往生している主な理由のひとつは、例外的な、過渡的な、中間的な、不明瞭な言語現象に関する理論を作り上げようとしないうちにあると思われる。意味を「強い」意味と「弱い」意味との二項対立で、文を「適格」か「不適格」かの二項対立で扱うのは、「意味成分」をプラスマイナス（+-）の二項対立で扱うのと同様、研究対象を媒介のない対立においてしか考えないという点で形而上学的発想に立っていることを示している。それ故少しでも人間の精神の内面へと分析を掘り下げて行くことを試みて、本稿の特に四章では敢えて一見扱いづらい、中間的・過渡的な言語現象を中心に議論を進めたわけである。